

2012年度 フランス短期留学プログラム帰国報告書

地域環境科学部・造園科学科・3年 12100019 今井さくら

1. 当初の目的

今回私がこのフランス短期留学プログラムに参加した目的は、フランス、特にパリでの緑地の使われ方、都市における緑と人のかかわり方を実際にこの目で見ることだった。ナポレオン3世の命令により、セーヌ県知事であったオスマンが技術士アルファンらと計画し改造していった都市であり、今や流行を発信する世界有数の大都市であるとともに、その都市景観の美しさも世界に知られているパリ。そこに都市における理想的な緑と人のかかわり方や景観があるのだらうと、ずっと思っていた。

2. 目的達成のために現地で活動した内容

街並みの統一性

全日程13泊14日の中でパリに行けたのは2日間だった。パリ1日目は午前10時頃にパリに到着し、ボーベラサールのパリの宿舎に余分な荷物だけ置いて皆で街へと出発した。初めて目にするパリの街並みは、テレビや雑誌など日本で見聞きしてきたものと全く同じで、長方形の窓辺が規則正しく並んだファサード（建物の正面をなす外観）が、通りのどこまでも続いていた。ここで何より圧倒されたのは、その統一の徹底であった。各々の建物のファサードの形が全く同じに揃えられている訳ではないが、大体どの建物もベージュ色の外壁に青っぽい色をした屋根があり、長方形の窓とそれに付随するバルコニーの手すりまたその色などが同じで、そういった建物が大体どれも同じくらいの高さに揃えられて、道の両側にまっすぐ伸びていた。小さな通りからシャンゼリゼ大通りのような大きな通りまで、多少の違いはあれど、その形式はすべて同じであった。実際にパリの街を歩いてみるまではここまで徹底してその形式が統一されているとは思っていなかったのも、最もそのインパクトが強かった。東京で見る乱立するビルであったり、住宅街のどれも形の異なる家々に慣れているから一層そう感じたのだらう。

道路での石材利用

また、道路、特に歩道の舗装に徹底して石材を利用していた点も印象に残っている。石材による舗装だと、使い方によってはともすると平坦に維持するのが難しい場合もあるが、パリで見た歩道の石材はどれも表面が平らに仕上げられていて、石と石の接着面も隙間の少ない仕上がりになっており、歩きづらさを感じることはなかった。車道でもルーヴル美術館やシャンゼリゼ大通り、シテ島付近では石材による舗装が見られ、中でも9cm四方の大きさの小舗石（ピンコロ）を使った舗装がよく目についた。張り方としては、弧を描くように石を張っていったうろこ張りを採用しているところが多かったように思う。先にも述べたパリの建物のなかでは、ファサードなどの中で長方形の窓や真っ直ぐ伸びた手すりがあったり、そもそも四角形に見える建物など直線が多用されているので、こういった張り方による曲線のアクセントが際立って美しく感じられた。また、車の走りやすさや補修の

し易さから言えばアスファルト舗装のほうが都合が良いのだろうが、そうしないところに観光都市のスタンスを見たような気がする。

街路樹

パリの街路樹については、ポプラ、モミジバスズカケノキ、トチノキ（マロニエ）が多くみられた。セーヌ川の両脇には特にポプラが多くみられ、スツと縦に長い樹形が並んでいるところは爽快な眺めだった。生長旺盛で大きくなるポプラのスケールだからこそ、川幅の広いセーヌ川の対岸から眺めた時も絵になっていたように感じた。他のモミジバスズカケノキやトチノキも大きく育つ樹種で、それぞれ大きい葉が共通点である。実際に街を歩いていたときには、特にモミジバスズカケノキに多かったが、落ち葉がよく目についた。まだ8月下旬だというのに、すでに日本であったら10月下旬くらいではないかと思うような落ち葉の量が歩道に溜まっているところもあった。現地で私たち日本人を案内してくれたポーベラサールのテオによると、それがフランスでは普通のことのように、例年そのようであった。

また街路樹について驚いたことのなかに、きっちり四角に刈り込まれた街路樹の存在がある。それは、セーヌ川をノートルダム大聖堂付近からコンコルド広場の方まで観光船で上り、アレクサンドル3世橋で降りてシャンゼリゼへ向かう出た比較的大きな通りで、4列のトチノキの並木からなっていた。今まで日本で刈り込みというと、生垣程度のものしか見たことがなかった。パリで見たそれは、5~6mはある、十分に高木に分類されるスケールをもったトチノキだった。後日、短期留学中に、庭園などで刈り込まれた大きな木を目にしたが、このときは都市パリの街中に刈り込まれた高木が街路樹として利用されているとは思ってもよらなかったのが驚きであったし、その眺めは相当なインパクトがあった。その後行ったシャンゼリゼ大通りでも同様に刈り込まれた街路樹を目にした。シャンゼリゼ大通りは、凱旋門からコンコルド広場を通り、更にその先にあるチュイルリー公園まで真っ直ぐに列なった通りで、フランス幾何学式庭園にも特徴的な軸線を強調したデザインであることは一目瞭然の通りだった。このような整形の刈り込みや軸線など、自国の庭園様式の要素が都市デザインの中にも浸透し、誰もがイメージするような“パリらしい景観”を成立させているという点が日本にはない部分であると思うし、そうやって形成された“パリらしい景観”が多くの観光客が惹きつけているという点が素晴らしいと思った。

歩道の利用

またそういった景観だけでなく場の使い方という点でもシャンゼリゼ大通りで日本との違いを感じた。それは歩道の使い方である。シャンゼリゼ大通りの歩道スペースは、車道から沿道の建物まで広くスペースがとってあり、幅員の半分程度のところに所々もう一列並木を配した形になっていた。つまり歩道がその並木によって二分されているのである。（もちろん並木があるだけなので、相互のスペースを行き来するには何の支障もない。）前方に何もなければ二つのスペースどちらでも通れるが、歩いていると時々車道側のスペースに、建物の延長的なオープンカフェや仮説の店舗のようなもの、小さなキヨスクのような売店が設置されており、そうなる歩行者は必然と建物側のスペースを歩くことになっていた。オープンカフェはフランスに来る前から、パリらしい光景の一つとして知って

いたが、シャンゼリゼ大通りのような大きく、交通量も多い通りの歩道も利用されている光景は少し今まで持っていたイメージと異なるものだった。また別のところでは、可愛らしい装飾がされ行列のできた、しかし店舗にしては高さが大分低いお店に出くわした。聞くとパリで一番美味しいマカロンのお店らしいが、本来の店舗が修理中のため仮にそこにお店を出しているということだった。一級の店やブランドが軒並みを連れ、多くの人が行き来するシャンゼリゼにおいてですら、歩道を歩くだけでなく、このように柔軟にオープンスペースとして利用しようとするフランス人の自由な精神と、それが可能なだけの面積を確保した道路計画に新鮮さと羨ましさを感じた。日本でも歩道に店の延長としてテラス席を設けた店はよくあるが、そもそも歩道の広さが十分確保されておらず通行人からしても狭く感じる場所の方が多いし、そもそも美しくないことが多い。

パリの公園 ~ビュットショーモン公園~

パリ滞在 2 日目の自由時間には、念願だったビュットショーモン公園に行くことができた。ナポレオンによるパリの大改造のときに技術士アドルフ・アルファンが設計し 1864 年から 3 年の期間をかけて造られ 1867 年に完成した公園で、パリ市北東に位置している。自由行動の時間があることはフランスに発つ前から分かっていたので、どこに行こうか、何を見ようかと、日本にいる頃から学科の先生のご意見まで伺って楽しみにプランをあれこれ考えていた。いくつかおすすめの公園やスポットを教えてくださいましたので出来るだけそれらをまわれたらと考えていたが、実際いざ自由時間をみてみると思いのほか短く、行きたかった場所の方向がそれぞれバラバラで散らばっていたこともあり、1,2カ所に絞らなければならなかった。迷った末、前期にとっていた講義「都市緑地計画学」でも散々取り上げられ、期末テストにまで出題されたビュットショーモン公園に行くことに決め、他に誰も一緒に行く人がいなかったため、私たちを案内してくれ、ポーベラサールで英語を教えているマーティンがわざわざパリの交通機関は初めてでは分かりづらいだろうとついて来てくれることになった。

その日は朝からとても良い天気、前日には見られなかった青空がでていた。公園まで向かうバスの中でマーティンが、これからむかうビュットショーモン公園やその付近は観光地の中心からは外れていて、地元のパリ市民の生活の場という雰囲気強い地区だと教えてくれた。確かにバスから見る街並みの風景は、乗り込んだセーヌ川付近から、隅々まで彫刻の施されたパリ市庁舎を通り、サン・マルタン運河を通り過ぎる頃には、アパートマンの窓に干している洗濯物が見られるようなだいぶ落ち着いた雰囲気のものに変わっていた。

着いたバス停の近くの門は公園の正門ではなかったようで、最初に入っていった公園の印象は今思うと大分地味だったかもしれない。そのときはついに来た、と浮かれていたが、見えるのは二股に分かれたアスファルトの坂とその分岐点に建つ二階建て(だったと思われる)の可愛らしい小屋、熱心に坂を上り下りして過ぎていくランナー達、そして周囲の鬱蒼とした木々くらいしかなかった。というのも公園に入ったその場所がすでに傾斜しており、先が坂になっているせいで見通しが利かないのである。マーティンの案内でマツが茂った坂を上っていくと見晴らしの良い場所に出た。そこもまだ傾斜地の中腹で道の片側が一面芝の下り坂になっており、その先に針葉樹、落葉広葉樹などいろいろな樹種が混ざ

った樹林があり、更にその遠方にパリの街並みが見えていたので、すでに大分高い地点に
いることがこのとき分かった。更に道を進むとフェンスで覆われた、以前ここから飛び降
り自殺をした人がいるということからその名がついた、通称“自殺者の橋”があり、その
先へ行くとこの公園で最も高い地点にある展望台へとたどり着いた。ガイドブックによる
と50mの高さがあるらしく、周囲を池で囲まれた島のような形をしており、公園内を見渡
せるだけでなく西の方角にはサクレクール寺院の姿も見ることができた。マーティンによ
るとこれは、丘の上に立っているサクレクール寺院と、高さのあるビュットショーモン公
園は、パリが平坦な地形のため間を遮るものが無くよく見えるからだということだった。
またここはもともと昔は石膏を採掘する石切り場として使われていた場所で、採られた石
膏は公園の展望台の四阿の柱をはじめ、パリのアパルトマンにも使われたということも教
えてくれた。そしてこれは日本に戻ってから分かったことだが、その後ここには処刑場、
屠殺場、汚物処理場と近づくのは止そうと思いたくなるような数々の施設が次から次へと
つくられ、ここに住もうとする人を望めなくなった末、当時のセーヌ県知事オスマンが公
園を計画したという背景があることが調べてみて分かった。さらに、この公園の起伏に富
んだ地形はもともと石切り場として地面などが掘られていたということもあるが、後に公
園として整備されたときにつくられたすべて人工的なもので、千人の労働者と百頭の馬を
駆使して今日見られる公園内の山、洞窟、川、湖などをつくりだし、その際大量のコンク
リートが使われたが、これは当時パリで最も初期のコンクリートの利用であった、とい
うことも分かった。

この公園を歩いてみて一番に感じたのは、やはりその地形の高低差を利用した景観の多
様さであった。園内の高いところの園路を歩いていると、少し遠くの木々の葉の色や質感
が各々異なっているのが分かり、実にさまざまな種類の樹木が植栽されていることを実感
した。またそういった高い地点では遠くパリの街並みや下に広がる池や園内をめぐる曲線
の園路を“見渡”し“見下ろ”す景色が楽しめるが、園路を下っていくと、途中すぐ脇に
地形の高低差を利用した滝が音を立てて落下していたり、一番下の地点まで降りると今度
は広々と広がる湖や芝生地が“見通”せ、さら上を“見上げ”ればさっきまでいた展望台
や橋が迫力の眺めをつくりだしていた。今まで私が日本で見てきた公園は、横（広さ）の
広がりによって景観に変化をつけた公園がほとんどだったため、ビュットショーモン公園
のように縦に幅をもたせることで多様な景観をつくりだしている公園は極めて新しく感じ
られたし、高低差によってつくられた山、洞窟、川、湖といった構成要素が都市の公園の
中にあるということも特異で面白いと思った。

3. 目的達成度の自己評価

この短期留学の目的の達成度を自己評価すると、5段階評価でいうと“4”である。い
ろいろとパリの街並みや緑地と人との関係を見てくることが出来たと思う。特にビュット
ショーモン公園やその後行くことができたリュクサンブール庭園などで普段パリの人々が
どのように公園や庭園を利用して、リラックスしたひと時を過ごしているのかが実際に見
ることができた点は大きかった。ただもう少し出来たら良かったと思うのは、もっとじっく
りと、例えば1日中公園で過ごしてみるといったことである。そうしたらよりパリの人々

の視点から公園を体験することができたのではないかと思う。

4. 今後の取り組み

今回の短期留学プログラムに参加することが出来、念願だったフランスの公園や庭園、農業景観といったところまで直に体験することが出来た。本当に貴重な体験であった。今後はこの経験を自分の中で大切に持ち続けながら、日本の都市における緑地の在り方やそういった空間と人との理想の関係、延いてはライフスタイルなどについて考える際の重要な自分のデータとしてこの経験を生かしていきたい。

また最後になったが、現地ではボーベラサールの学生アレックス、テオ、マチルダ、オリビアやサラを始め、学校スタッフのモッドさんや先生のマーティン、更には毎日ご飯をつくって下さった食堂の方々など、本当に多くの方々の心遣いと温かな協力によって、楽しく安全に14日間を過ごすことが出来た。心からの感謝と、これからも変わらない友情の気持ちを伝えたい。Merci mille fois!

As the end of this report, I would like to say thank you to Institut Polytechnique Lasalle Beauvais's everyone. Especially to Theo, Alex, Mathilde, Olivia, Sara, Maud, Martine and cafeteria staffs. Thanks to their kind consideration and support, we could spend amazing two weeks safely. I thank all of them from the bottom of my heart and I want to tell them our heart of lasting friendship. Merci mille fois!